

‘O wommanliche wif’ — クリセイデ論

六反田 收

1

チョーサー (Geoffrey Chaucer) の『トロイルスとクリセイデ』 (*Troilus and Criseyde*) の語り手は、第5巻のエピローグで、ヒロインであるクリセイデの犯した不実の罪の責は自分にはないとして、次のように言う。

al be that Criseyde was untrewe,
... for that gilt she be nat wroth with me.
Ye may hire gilt in other bokes se; (TC, 5. 1774-76)

(クリセイデが不実であったとはいえ、[ご婦人方は] 彼女の罪を咎めて私をお怒りにならないでください。彼女の罪は他の書物にも見られるところですよ。)¹

文学史を繙くまでもなく、これは確かにその通りである。チョーサー以前では、ブノワ・ド・サント・モール (Benoit de Sainte-Maure)、グイード・デッレ・コロネ (Guido delle Colonne)、それにボッカッチョ (Giovanni Boccaccio) が、呼び名はそれぞれに多少異なるにせよ、このヒロインの心変わり語っている²。しかし、語り手が物語の随所でこれらの典拠に忠実であることを強調しているにもかかわらず、多くの改変をチョーサーが独自に行な

っていることもまた事実であって、その内容がどのようなものであったかが直ちにわれわれの関心の対象となる。

ただし、筆者はここでは作者が典拠に加えた個々の変更に興味があるのではない。チョーサーがクリセイデの裏切りを変更不能な、いわば“与件”として受け入れているということは、冒頭の「トロイルスの二重の悲しみ」(‘The double sorwe of Troilus’ (TC, 1. 1)) という言葉に要約的に示されているように、トロイルスを「愛の殉教者」として扱い、物語を地上的な愛の空しさの教訓として語るという、これはこれで一貫した作者の態度と直接関連しているのであるが、この表立った筋書きからはチョーサーの創意は（作者自身のおそらくは意図的なミスティブイケーションも加わって）極めて見えにくい。ここでの作者の意図は何であったのか、それを知る手掛かりがチョーサーのクリセイデにたいする（特にボッカッチョとは異なる）扱いに見出されるのではないか。これが本稿の示唆せんとするところである。

2

チョーサーでは第4巻になるが、クリセイデがギリシャ軍の捕虜になっていたアンテーノール (Antenor) と引換えにギリシャ側に引き渡されことに決まった後、彼女がトロイルスと過ごす最後の一夜の場面で、ボッカッチョの『フィロストラト』(Il Filostrato) では、主人公のトロイオロ (Troilo) が、クリセイダ (Criseida) にたいして彼が彼女の何に、彼女のどこに、惹かれて彼女を愛するようになったのかを語るシーンがある。トロイオロはこう言う。

Non mi sospinse ad amarti bellezza,
la quale spesso altrui suole irretire;
non mi trasse ad amarti gentilezza
che suol pigliar de' nobili il disire;

non ornamento ancora né ricchezza
 mi fé per te amor nel cor sentire;
 delle quai tutte sei più copiosa,
 che altra fosse mai donna amorosa;

ma gli atti tuoi altieri e signorili,
 il valore e 'l parlar cavalleresco,
 i tuoi costumi più ch'altra gentili,
 ed il vezzoso tuo sdegno donnesco,
 per lo quale apparien d'esserti vili
 ogni appetito ed oprar popolesco,
 qual tu mi sei, o donna mia possente,
 con amor mi ti miser nella mente. (Fil., IV. 164-165)

(私があなたを愛するようになったのは、人々をしぼしば虜にする美しさのせいでも、またよく高貴な人々の思いを捕らえる生まれの良さのせいでもなく、それにまた身の飾りや富があなたへの愛を私の心に感じさせたのでもありませんでした。あなたはそうしたものを全て、他の愛すべき女性たち以上に、たっぷりお持ちではあるのですが。

そういうものではなくて、あなたの気品ある毅然としたしぐさ、心と言葉にうかがえる奥ゆかしさ、他の女性以上に優雅な物腰、そしてまた、人々が普通に抱く思いや普通にとる行動もあなたにたいしては全て礼を失するものに思わせた、魅力あふれるあなたの貴婦人然とした誇りの高さ、ああ、まことに尊い私の女主人よ、そうしたものがあなたを私にとって忘れえぬ、慕わしいお方としたのでした。)³

この引用部分が特に注目されるのは、チャーサーではこれが完全に脱落していて、語り手はトロイルスにこのような科白を言わさないばかりか、意外にも、主客転倒して、クリセイデがトロイルスにたいして、彼女は彼の誠実さ、心の高貴さ、男らしさにこそ惹かれたのだと語るシーン (TC, 4. 1667-80) に、そっくり置き換えられているからである。

このチャーサーによる書換えが、意図的、故意でなくして、なんであろう。チャーサーはクリセイデを貴婦人として語ることに消極的であったのではなかったかという疑いがここに生じるのも当然である。そこで、チャーサーは一体トロイルスがクリセイデを最初に見た時の様子をどう実際に描写していたのであったかが、改めて興味ある問題になってこよう。ここでもボッカッチョの『フィロストラト』との対比は、有効であるように思われる。

トロイではギリシャとの戦いが続くさなか、人々が老若男女こぞって参列する春の祭典に、寡婦であるクリセイデも喪服姿で加わっている。

Among these othere folk was Criseyda,
 In widewes habit blak; but natheles,
 Right as oure firste lettre is now an A,
 In beaute first so stood she, makeles.
 Hire goodly lokyng gladed al the prees.
 Nas nevere yet seyn thyng to ben preyed derre,
 Nor under cloude blak so bright a sterre

As was Criseyde, as folk seyde everichone,
 That hir behelden in hir blake wede.
 And yet she stood ful lowe and stille allone,
 Byhynden other folk, in litel brede,
 And neigh the dore, ay undre shames drede,
 Simple of atir and debonaire of chere,
 With ful assured lokyng and manere. (TC, 1. 169-182)

(これらの人々の中に、寡婦の黒い喪服を纏うクリセイデもいました。しかし、その衣裳にもかかわらず、現在のわれわれの最初の文字がAであるのとまったく同じく、美しさの点では第一人者、他に肩を並べる者などなくて、その美しい顔はそこに集う大勢の人々を喜ばせていました。喪服姿の彼女を見た誰もが言ったように、クリセイデほどに賞讃に値するものもなく、また彼女ほどに光輝く暗夜の星も見られたことはなかったのです。

しかし彼女は、ただ独り、きわめて慎ましやかにひっそりと、たえず恥を恐れながら、人々の後ろの狭い入口寄りの場所に、装いも質素なら、表情も控え目に、落着きはらった眼差しと物腰とで佇んでおりました。

She nas nat with the leste of hire stature,
But alle hire lymes so wel answerynge
Weren to wommanhod, that creature
Was nevere lasse mannyssh in semyng;e;
And ek the pure wise of hire mevyng
Shewed wel that men myght in hire gesse
Honour, estat, and wommanly noblesse.

To Troilus right wonder wel with alle
Gan for to like hire mevyng and hire chere,
Which somdel deignous was, for she let falle
His look a lite aside in swich manere
Ascaunces, “what, may I nat stonden here?”
And after that hir lokyng gan she lighte,
That nevere thoughte hym seen so good a syghte. (TC, 1. 281-294)

(彼女は背は低すぎもせず、手足はいかにも女性らしく、これほど男性らしさから隔たった者もいないと思われました。そしてまたその物腰だけからも、名誉が、身分が、女性らしい高貴さが、十分に窺えたのです。

トロイルスにまったく気に入ったのは、彼女の幾分他の人を見下すような振舞いと表情でした。というのは、彼女はあたかも「おや、私がここにはいけないの？」と言うかのように視線を少し脇に落とし、それからまた顔を明るくしたのですが、彼にはこれほどに素晴らしい眺めは見たことがないように思われたのです。

一方、『フィロストラト』ではこう述べられている。

Tra li qua' fu di Calcas la figliuola

Criseida, quale era in bruna vesta,
 la qual, quanto la rosa la viola
 di biltà vince, cotanto era questa
 più ch'altra donna bella; ed essa sola
 più ch'altra facea lieta la gran festa,
 stando del tempio assai presso alla porta,
 negli atti altiera, piacente ed accorta. (Fil., I. 19)

(その人々の中に、黒い喪服を纏ったカルカースの娘クリセイダもいました。薔薇が堇に美しきで勝るそれほどに、彼女は他の女性に立ち勝って美しく、寺院の入口のすぐ近くに、気品と魅力と分別を窺わせながら佇むその姿は、彼女一人で他のいかなる女性よりもこの大いなる祭りを華やがせておりました。)

Ella era grande, ed alla sua grandezza
 rispondeano li membri tutti quanti,
 e 'l viso avea adorno di bellezza
 celestiale, e nelli suoi sembianti
 quivi mostrava una donnesca altezza;
 e col braccio il mantel tolto davanti
 s'avea dal viso, largo a sé facendo,
 ed alquanto la calca rimuovendo.

Piacque quell'atto a Troiolo e 'l tornare
 ch'ella fé 'n sé alquanto sdegnosetto,
 quasi dicesse: 《E' non ci si può stare》. (Fil., I. 27-28)

(彼女は背が高く、その背丈にすべて手足が釣り合っていました。顔は天国の美しきで飾られていて、そこに立つ彼女の姿は貴婦人の威厳を示しておりました。そして、マントを片方の腕で顔のところまで掲げ、押し退けるようにして混み合う群衆を少し遠ざけておりました。)

トロイオロには、このしぐさと、それにまた、あたかも「こんなところにいられはしない」と言うかのように、いくらか人を見下すような態度で

元の姿勢にまた戻る様子とが、気に入ったのです。)

このような対比はすでにしていろいろなことをわれわれに教えてくれているように思われるのであるが、ここで注目されるのは、‘*donnesca altezza*’ に対する ‘*wommanly noblesse*’ (TC, 1. 278) や ‘*debonaire*’ (TC, 1. 191) のアンビギュアスさ、クリセイデの描写に見られる威厳とへりくだりの併存、それに彼女の(クリセイダと比べての)あまり貴婦人らしからぬしぐさ、などである⁴。

ここでは未だ曖昧な均衡状態に置かれていることが知られるが、クリセイデの貴婦人らしきの欠如の印象は、物語を進めることによって一層深まって行く。しかし、チョーサーの筆がクリセイデに貴婦人らしさを付与することに徹底して否定的な方針にあることを確実に告げるのは、クリセイデがいよいよギリシャ側に引き渡される場面の描写であろう。ここではボッカッチョを先に引用することにしよう。

Criseida, poi vide che partire
 le convenia, quale ella era dogliosa,
 con quella compagnia che dovea gire,
 sopra il caval montò, e dispettosa
 con seco stessa cominciò a dire:
 — Ahi, crudel Giove, e Fortuna noiosa,
 dove me ne portate contra voglia?
 Perché v'aggrada tanto la mia doglia? — (Fil., V. 6)

(クリセイダは悲しくとももう出発しなければならないと見ると、連れ立つ一行とともに馬に乗り、怒りをこめて心の中でつぶやき始めたのです。「ああ、残忍なジュピターよ、お節介な運命よ、私の意志に逆らって私をどこに連れて行こうとなさるのです。なぜ私の悲しみがあなた方にはそんなにも楽しいのです」)

Quinci si volse disdegnosamente
 ver Diomede e disse: — Andianne omai,
 assai ci siam mostrati a questa gente,
 la quale omai sperar può de' suoi guai
 salute, se ben mira sottilmente
 all'onorevol cambio che fatto hai:
 ché hai per una femmina renduto
 un sì gran re, e cotanto temuto. —

E questo detto, al caval degli sproni
 diè, senza dir fuor che a' suoi addio;
 e ben conobbe il re e' suoi baroni
 lo sdegno della donna. . . . (Fil., V. 8-9)

(それから蔑みをもってディオメーデスの方を向き、こう言いました。「さあ、行きましょう。この人たちの見せ物になるのはもうこのぐらいで十分です。彼らもあなたが行なった名誉ある交換をよくよく考えてみるならば、今や不幸からの救いの希望を見出すことでしょうよ。なにしろあなたは、あれほどに恐れられた、あれほどに偉大な王を、女一人と引換えに、お渡しになったのですから」

こう言うと、家の召使い以外の人々にはさようならも言わずに馬に拍車を入れました。王や諸侯たちも彼女の怒りをはっきりと感じていました。……)

E già essendo per accomiarsi,
 egli e Criseida si fermarono alquanto,
 e dentro agli occhi l'un l'altro guatarsi,
 né ritener poté la donna il pianto,
 e poscia per le man destre pigliarsi,
 e ver lei Troiol ancor s'accostò tanto,
 che, pian parlando, ella il poté udire,
 e disse: — Torna, non mi far morire. —

E senza più, rivoltato il destriere,
 tutto tinto nel viso, a Diomede
 non parlò punto, e di cotal mestiere
 sol Diomede s'accorse, e ben vede
 l'amor de' due, ... (Fil, V. 12-13.)

(そして今やまさに別れの時がきて、彼〔トロイオロ〕とクリセイダはちよつと馬を止め、互いに目を見つめ合いました。彼女は涙を抑えることができませんでした。それから互いに右手を取り合い、トロイオロは低い声でも聞こえるように彼女の方に更に寄って、こう言ったのです。「戻っておいで。私を死なせないでくれ」)

もうそれだけで、まったく暗い顔で馬の向きを変え、ディオメーデスには一言も声を掛けませんでした。ディオメーデスはただ一人その上の空加減に目を留めて、二人の間の愛をしっかりと見てとったのでした。

これに相当する場面のチャーサーの叙述はこうである。

Criseyde, whan she redy was to ride,
 Ful sorwfully she sighte, and seyde "Allas!"
 But forth she moot, for aught that may bitide;
 Ther is non other remedie in this cas.
 And forth she rit ful sorwfully a pas. (TC, 5. 57-61)

(クリセイデはまさに馬に乗ろうとする時、いとも悲しげに溜息をつき、「ああ、悲しい！」と言いました。しかしどうあっても行かねばなりません。この場合、そうするしかないのです。それで、ひどく悲しげな歩調で馬を進めました。)

And therwithal he moste his leve take,
 And caste his eye upon hire pitously,
 And neer he rood, his cause for to make,
 To take hire by the honde al sobrelly.

And Lord, so she gan wepen tendrely!
 And he ful softe and sleighly gan hire seye,
 “Now holde youre day, and do me nat to deye.”

With that his courser torned he aboute
 with face pale, and unto Diomede
 No word he spak, ne non of al his route;
 Of which the sone of Tideus took hede,
 As he that koude more than the crede
 In swich a craft, and by the reyne hire chente; (TC, 5. 78-90)

(かくして彼 [トロイルス] も別れを告げなければならず、悲しげな目で彼女の方を見やると、今一度懇願しようと馬を寄せ、まったく真剣な面もちで彼女の手を取ったのです。すると彼女は、ああ、なんと切なげに泣いたことでしょう！ 彼は低い声で人に聞かれぬようにこう言いました。

「約束の日を守って、私を死なせないでくれ」

そう言うと、蒼白い顔で馬の向きを変え、ディオメーデスにも、また供の者の誰にも、一言もなかったのです。そのことに、そうした技なら初歩以上の心得のあるテューデウスの息子 [ディオメーデス] は目を留めて、彼女の馬の手綱を取ったのです。

トロイの王にもはっきりと伝わったクリセイダの怒りと侮蔑(ちなみに、‘femmina’ (Fil, V. 8. 7) も怒りの言葉である)⁵。それにたいする、クリセイダのあまりにもパセティックで露わな悲しみの姿。トロイルスとの仲を覚られた直接の責任は男性の側にあつて、彼女にはなかったにせよ⁶、このディオメーデスは、なんと、クリセイデを案内してまだギリシャ陣営に辿り着かない内に、早くも彼女を実質口説き始めている！ 一方、ボッカッチョでは、おそらく二人は終始無言であった。彼女の威厳と気品とが、声を掛けることを彼に躊躇させたことであろう。怒れるクリセイデは、久し振りに再会した父親カルカースにさえ無言で対した。また、‘Andianne omai [Now let us go]’と言う

この場の主導権も常に彼女の側にあつて、クリセイデのようにディオメーデスに牽かれて行つたのではなかつたことにも、注目すべきであろう。

『トロイルスとクリセイデ』の作者は、ヒロインの貴婦人らしさ (*donneschezza* [*ladylikeness*]) を、貴婦人としての矜持を、奪つた。これは今や明らかである。しかし、チョーサーの筆の巧みさは、このことを普通われわれ読者に気づかせない。トロイルス (そして叔父のパンダルスも) が彼女に向かつて頻発する ‘my lady’ という呼び掛けや、物語の語り手がこれを逆手に取つて同様に頻発する、この ‘my lady’ の間接表現 ‘his lady’ とに、読者は眩惑されてしまっているからである⁷。

3

しかし、われわれもここまでくると、クリセイデから奪われて行くものが (そのすべてをチョーサーが新たに奪つたわけでは無論ないのであるが)、彼女の貴婦人らしさ (*donneschezza*) だけではないことに、容易に気づく。むしろ、そのことに新たな驚きをもって改めて気づく、と言うべきであろうか。

そもそも物語の初めから彼女はすでに夫を失つた寡婦であつた。そして開幕早々に父親がギリシャ側に走つて、父親を事実上失う。後に残され、裏切り者の娘となつた彼女には、「苦衷を打ち明けられる友達も誰一人いなかつた」(TC, 1. 97-98)。そうしてやがてギリシャ側に引き渡されることになると、これまでは自分を守ってくれる「鉄壁」(‘a wal Of stiel’) と「盾」(‘sheld’) とも思つていた恋人のトロイルスはおろか、先にトロイでの身の安全を約束してくれて、今また引き渡しに独り幾度も反対してくれたヘクトールの庇護も、またあのお節介焼きの叔父パンダルスの助言さえも失う。ここでも「彼女の最大の苦しみは、苦衷を打ち明けられる人が誰一人いないことだつた」(TC, 5. 727-28)。トロイルスについて語られている比喩 (ちなみにこれはチョーサーによる挿入であるが)、

And as in wynter leues ben biraft,
 Ech after other, til the tree be bare,
 So that ther nys but bark and braunche ilaft,
 Lith Troilus, byraft of ech welfare,
 Ibounden in the blake bark of care,
 Disposed wood out of his wit to breyde, (TC, 4. 225-231))

(冬に木の葉が一枚また一枚と剥がれ行き、やがて木は裸となって樹皮と枝しか残されない。それと同じくトロイルスはすべての幸せを奪われて、苦悩の黒い樹皮の中に閉じこめられ、気も狂わんばかりの有り様で身を横たえていた。)

は、むしろはるかにクリセイデに似つかわしい。彼女の普通 gradual degradation の過程と見られているものは、gradual privation (剝奪) の過程とこそ言うべきであった。

今や孤立無援の彼女は「私は罠にかかった」(‘I was in the snare’ (TC, 5. 748)) と嘆く。それは誰が仕掛けた罠だったのであろう。チャーサーは、原作者にロリウス (Lollius) の名を与えることによって、彼女の真の創造者の実体をも失わせているのである。

4

かくして全てを剥がれたクリセイデにそれでもなお残されていたものは、トロイルスのクリセイデへの呼び掛け、あのほとんど類語反復的な ‘O wommanliche wif’ (「おお、女性らしい女性よ」) (TC, 3. 106, 1296) に凝縮された「女性らしさ」(wommanhede [womanliness])、あるいは femininity としか表わしえないものであった⁸。もっとも、彼女の「男らしさからもっとも隔たる」「女らしさ」には、美しさと、最大の彼女の美点である優しさ、気立てのよさが、おそらく最後まで付随した。それにまた、「愛における誠実さ」

（‘trouthe in love’ (TC, 5. 1055)）を守ろうとする必死の思いも続いたと解さるべきであろう。彼女は少なくとも二度にわたって、トロイに戻る意志のあること、ただし日時は定かにし得ないことを、トロイルスに書き送る (TC, 5. 1424-28; 1618-20)。彼女を不実な女とする既定路線からすると、これらはすべて偽りに満ちた言葉と見なされる。そのように受け取るのは、遺憾ながらトロイルスただ一人ではない。しかし、少なくとも、これを彼女の本心ではないとする根拠は何もないことも、われわれは知るべきであろう⁹。

これらの美点は、ドナルドスン (E. Talbot Donaldson) に倣って、amiability ないしは lovability と呼んでもいいかもしれない¹⁰。しかし、残されたものがそれだけで、他に何一つない状況に置かれたとすれば、それでも女性は生きて行けるものなのか。これを試すことは、恐るべきことである。しかし、チャーサーの『トロイルスとクリセイデ』の狙いはそこにあったと今や思わざるをえない。つまり、一人の女性から、美しさと amiability (ないしは lovability) 以外のすべてを、心の支えのすべてを奪い去り、完全な孤独の中で男性 (叔父のパングルスもその一人だった) の誘惑にさらす試み、あるいは、この世の激しい荒波にそのような女性が翻弄される姿を描く苛烈な試み、だったのだと。今やここでは詳述はなしえないが、こう考えるとエピローグの一語一語に納得が行く。

ただ、たとえ架空の女性に対してではあれ、そうした試みの苛酷さを作者は意識していたであろうかと言えば、当然そうだっただろうと私は思う。あくまでもそれと気づかせぬ形で行われている点もそうであるが、例えばエピローグの言葉、それも特に「もしお望みならば、ペーネロペーの貞節や善女アルケステイスについて、むしろ私は喜んでお話ししたい」(‘And gladlier I wol write, yif yow leste, / Penolopees trouthe and good Alceste.’ (TC, 5. 1777-78)) というあたりは、(事実、チャーサーはこの作品の後、一転して貞女を語る『善女伝説』*The Legend of Good Women*の創作に向っている)、この『トロイルスとクリセイデ』が一つのテーマの実験的な追求であったことを

明らかに示唆していよう。

クリセイデの姿が作品からいつしか消えてしまうのも、作者としてはもうこれ以上は進みえないところまで彼女を追いつめたということであったのかも知れない。彼女はすでに作者の翼に完全に掛かっていた。彼女は「ああ、私がこういうことになろうとは！」（‘Allas, that swich a cas me sholde falle!’ (TC, 5. 1064)）とただ嘆くのみであったが、クリセイデの乗る馬の手綱をしっかりと握って先導していたのは、ディオメデスならぬ、作者その人であったのだ。もしそうであったとすれば、彼女を更に娼婦にまでおとしめ、癩病を患う乞食の姿に描いたヘンリスン（Robert Henryson）の『クレセイドの遺言』*The Testament of Cresseid*は、チャーサーに言わせると、もはや蛇足だったことになろう。

註

1. チャーサーからの引用は、便宜をも考慮して、すべて Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, Third Edition, OUP, 1988 に拠った。引用文に付した散文訳は、『フィロストラト』の場合も同様、単に参考までのものである。
2. 『トロイルスとクリセイデ』のソースについては、最近のものでは、Barry Windeatt, *Oxford Guides to Chaucer: Troilus and Criseyde*, OUP, 1992, pp. 37-137 が詳細で、参照に便利である。
3. 『フィロストラト』からの引用は、すべて *Tutte le opere di Giovanni Boccaccio* a cura di Vittore Branca, Mondadori, II (1964) に拠った。なお、註(1)を参照。B. A. Windeatt (ed.), *Geoffrey Chaucer, Troilus and Criseyde*, Longman, 1984 は、『フィロストラト』と『トロイルスとクリセイデ』を同頁に平行に納めて対比に便利であるが、前者のテキストは Vincenzo Pernicone の版 (Laterza, 1937) であることに注意。
4. *The Riverside Chaucer* は ‘debonaire’ (TC, l. 181) を gracious と註している (p. 475)。また ‘col braccio il mantello tolto davanti / s’avea dal viso’ (Fil, l. 27. 6s) では、筆者の dal viso = al viso とする点は、Robert P. apRoberts and Anna Bruni Seldis (*Giovanni Boccaccio, Il Filostrato*, Garland, 1986, p. 33) も同じと見

ることができようか。

5. この 'femmina' (*Fil.*, V. 8. 7) は donna/femmina、lady/woman の対比を示唆して、注目に値する。
6. トロイルスのここで示す軽率さは、『フィロストラト』では明らかなように (cf. *Fil.*, V. 11)、その場におけるパンダルス⁵の不在と関わりがあるように思われる。
7. 'estatlich' [=dignified] (*TC*, 5. 823) などは、'as bokes us declare' (5. 799)、'they writen' (5. 816) を隠れ蓑にしての、完全な目潰しと解される。
8. D. S. and L. E. Brewer (*Troilus and Criseyde*, Routledge, 1969, pp. 120, 159) や R. A. Shoaf (*Troilus and Criseyde*, Colleagues Press, 1989, p. 116) は 'wommanliche wif' に pattern of womanhood/womanliness と註している。
9. クリセイデの手紙、特に Litera Criseydis (*TC*, 5. 1590-631) については、拙論「秘めたる愛のパラドックス」(『英文学評論』第64集、1992、pp. 1-21) を参照。
10. E. Talbot Donaldson, *Chaucer's Poetry*, Ronald, 1975, p. 1132.

(本稿は1997年11月1日京大英文学会における口頭発表草案に基づくものである。)